

キャラクター名 プレイヤー名

シンドローム	ソラリス		ワークス	UGN支部長D	カヴァー	カフェの店員
	オルクス					
オプション			年齢	32	性別	XX
覚醒	感染	衝動	加虐		初期侵食率	29 %
出自	待ち望まれた子		経験	ニュース	邂逅	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	24
肉体	0	0	1			1	行動値	4
感覚	1	0	0			1	(非装備時)	4
精神	2	0	0			2	戦闘移動	9
社会	5	1	1			7	全力移動	18

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			RC			交渉	1	
回避			知覚			意志	3		調達	2	
運転:			芸術:			知識: <small>シライクリス列</small>	1		情報: UGN	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品		合計装甲:	0	合計回避:	0
セーフハウス					
ロイス					
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費	
メモリダイバー	P	N			
マクロ	P 一体感	N 偏愛			
伊藤灯火	P 友情	N 食傷			
<small>N市支部長: 解働 零 [カイドウ レイ]</small>	P 連帯感	N 偏愛			
リオ	P 庇護	N 脅威			
織田瀬那	P 同情	N 恐怖			
茨あきら	P 庇護	N 隔意			
最大財産P:	18	残り財産P:	18		

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果:	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果:	コスト分のHPで復活							
メモリー	1							
効果:	リオちゃん……							
扇動の香り	5	5	セット	対象	視界	—	—	
効果:	ラウンドの間、対象を攻撃する命中判定ダイスに+LV							
力場の形成	3	3	セット	単体	視界	—	—	
効果:	対象の攻撃力LV*2							
要の陣形	3	3	メジャー	—	3体	シンドローム	—	
効果:	行動の対象を3体に							
導きの華	7	4	メジャー	視界	単体	RC/交渉	—	
効果:	対象は次のメジャー達成値+LV*2							
戦乙女の導き	2	2	メジャー	至近	単体	RC	—	
効果:	対象の次のダイス+LV、攻撃に+5							
狂戦士	5	5	メジャー	視界	単体	RC	80	
効果:	C-1、ダイス+LV*2							
妖精の手	3		オート				100	
効果:	ダイスを							
地獄耳	★							
効果:								
麗しの容貌	★							
効果:								
声なき声	★							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

成長記録
 1回目 新規イージーエフェクト 声なき声取得 他はレベルアップのみ
 2回目 妖精の手3を取得、他はレベルアップ
 3回目 メモリー取得、意思1、知識Lv1

黒髪緑目の柔らかい笑顔が特徴的な謎めいた女性。
 彼女の名は中村萬代。きさらぎ市にあるカフェの副店長を、双子の姉と共に務めるただのオーヴァードである。
 店長であり、きさらぎ市UGN支部の支部長である【解働 零】とは、姉、そして【伊藤 灯火】共々幼馴染だった。ある日のこと、双子と灯火はいつものように
 姦しく、石にぶつかったか何かで入院して以来、いつにもましてそっけない零の退院祝いを買う、という名目でデパートに遊びに来ていた。
 その帰り道、バスに揺られながら最近の零の付き合ひの悪さについて愚痴っていた三人。しかし、突然バスは揺れたかと思うと謎の力によって中空に放り上げ
 られ……

横転した。
 炎上する赤い炎に、双子を庇うように立つ灯火のもっと紅い髪の毛がよく映える。
 「綺麗」そうつぶやいたのはマシロだったのか、マクロだったのか。
 零にこのお見舞いを渡せなかったのは、ちょっとだけ心残りだな。
 指先が冷たくなっていくのを二人は感じながら、ゆっくりと目を閉じた。

…何かが流れ込むような感覚がある。ドクン、ドクン、と心音が五月蝿い。それに、誰かが「ごめんなさい、ごめんなさい……！」と謝る声が聞こえる。
 目を開くと、綺麗な女の人が大粒の涙を零しながら私の手を握っていた。「ごめんなさい、私が間に合わなかったせいであなた達は……」